どんどん前へ

平成十二年度　六年　女児

「やっぱり五年生の方がよかったあ。」

六年生になって最初の仕事でもらした言葉だ。五年生と六年生では、仕事の量が二倍近くちがうことは知って、たが、まさかこれほどまでにちがうとは。そこで私特有のくせが出てしまう。「逃げ虫」だ。

「誰かやってくれる人、いませんか？」という言葉は、逃げ虫最大の弱点。（やろうかな、でも失敗したらどうしよう。）という思いがいつも頭をよぎる。「もしも～したら」は、「逃げ虫」の口ぐせ。こんな自分が嫌になってくる。しかし、「逃げ虫」は改善された。ある勉強のおかげである。

六月、総合的な学習が始まった。ボランティアをテーマに、何をするかみんなで話し合った日のこと。ある人が、「フリーマーケットをして、資金に変えたらいいと思います。」と発言した。その時私もああ、それがいいな。私も賛成と考えた。でも意見を発表しなかった。こんなところにも「逃げ虫」がある。話し合いは、結局お年寄りや障害のある方に何か贈ること、その資金は空き缶や空きビンを集め換金して集めることでまとまった。

なるべくたくさんの空き缶や空きビンを集めるため、各地区の担当を決めることになった。だが担当決めの日、私は学校を休み、後日大きな会社や学校を回る担当に決まったことを聞いた。何だか責任が大きそうで、ちょっと不安になったが、活動はどんどん進んでいった。

まず、空き缶、空きビン回収の協力依頼に会社、学校を回った。やはり最初は緊張する。ドックン、ドックンと心臓が鳴る。最初の言葉は私と決まっている。

「今日はお願いがあって来ました。」

「はい、では応接室へどうぞ。」ここで心のドキドキはカアーっと体温へ変わっていった。みんな小声で

「小学生が応接室なんて！」

「ソファーすごく、ふっかふか！」などと言っている。私も、初めての経験にびっくりし、ドキドキ、ワクワクが混ざったような気持ちになった。

私が説明すると、担当の人は、

「いいですよ。がんばって下さいね。」と了承してくれた。私は、（ああよかった。断られたらどうしようと思った。ようし、次もがんばるぞ。）とドキドキから安心感に変わっていった。一件目が了承されると、二件、三件と了承さ

れるのが私の励みになっていった。私達は、プラスワン、管原工務所、第二中学校、若浜保育園、ト一屋から了承を得ることができた。

それからは、回収し仕分けする作業の繰り返しだった。地域の人々の協力のおかげで、缶もビンもたくさん集まった。

「暑い」

「疲れた。」

などと言って地区からみんな帰ってくる。缶をつぶす作業も一苦労だ。「逃げ虫」の私のこと、当然逃げるだろう。しかし、空き缶が増えていって、（どれくらいのお金になるんだろう。）という思いと、空き缶をつぶす楽しさ、それとみんなの努力で、「逃げ虫」はどこかに飛んでしまった。それどころか、以前の私には考えられない

「私、これ卓球室に持って行くね。」

「大変そうだね、手伝うよ。」という言葉が自然にぽろっと出ていた。

夏休み中もみんなで回収を続け、教室からあふれるほどの空き缶、空きビンが集まった。九月、ビン以外の空き缶をすべて新田商店さんに引き取ってもらい、資金に変えてもらった。（自分達が集めた空き缶、高額へ！）と祈った結果は一万九百五十円。うれしくて、

「やったあ！」

「すごいお金だね！」

と大騒ぎしてしまった。それと同時に 大きな達成感を味わった。その後私達はさらに回収した空き缶、空きビンを換金し、最終的に三万三千円という大金を手にした。

そして、そのお金はボランティアサークル「あらた」さんに贈ることになった。外出しなくても映画を楽しめるようにとビデオデッキを買い、交流会で渡すことになった。私は、プレゼントを贈る役に立候補した。やはり以前とは変わった私である。交流会であらたさんにプレゼントを渡す時、みんなに見られてとても緊張したが、この緊張感も「逃げ虫」には味わえないものがある。あらたさんはとても喜んでくれた。私も、 やった、渡せたぞ と別の喜びをかみしめていた。

本当に、この学習で私は変わった。前は「嫌」という性格が強く、進んで仕事をしなかった。しかし、この活動を通して、与えられた仕事はもちろん、それ以外の仕事にも力を注ごうと思えるようになった。でもまだ私の中に「逃げ虫」は少し残っている。強い精神でやっつけていこうと思う。